

STEM女性が経験する二重の抑圧

科学分野の労働市場におけるフェミニズム問題を中心に

HWANG Nari

本研究では、STEM(科学技術)分野で就業する、あるいはしようとしている女性が直面している問題について、それを労働市場一般において女性が経験しているジェンダー不平等と、科学技術分野の男性中心的な特性によるさらなる不利益、すなわち<二重の抑圧>という枠組みで論じる。さらに、とくにフェミニズムの観点から、ジェンダー不平等に基づく性別賃金格差と性別による職業(職務)の分離が強い韓国と日本の女性に注目して、科学技術系女性の労働市場におけるパフォーマンスを統計的な方法で分析する。その際、サンドラ・ハーディングのフェミニズム認識論に依拠しつつ、女性が直面している現実におけるジェンダー格差を分析し、女性のライフスタイルに配慮したジェンダー支援プログラムと、職場での女性の占める割合が、STEM女性の働き方にどんな影響があるかを分析する。

本研究ではまず、国別データの分析を通じて、科学技術分野においてははっきりと女性排除現象があることを示した。さらに、STEM教育の分野で女性の参画が進んでもSTEM就業における女性の過少がみられること、すなわち教育によるSTEM女性の人材供給と、STEM労働市場における需要とのあいだにギャップがあることを示唆した。このことは、STEM職業における男性支配に起因する女性の排除傾向があること、さらに後発国の開発主義の理論から見て、後発国においては教育制度改革が実際の労働力のニーズの変化に先行するということを示している。

国別データの分析からは、女性の数学の学力の向上が女性の職業研究者の比率を高めるということも明らかになった。すなわち、女性研究者の育成ために、女性たちに数学と科学などSTEM能力に対する興味を持つように支援することには意義があると思われる。

次に本研究では、国別データの分析によって明らかになったSTEM女性の過少現象について、その実態を探るべく、韓国と日本の個人レベルデータによって賃金(年収)格差の分析を行った。その結果、韓日STEM女性には二重の抑圧があることが明らかになった。性別賃金格差

と職業別賃金格差について分析した結果、いずれの国においても、女性は STEM 職に就くことで相対的に高い収入を得るが、それでも大卒男性(STEM 職、非 STEM 職いずれも)よりも収入が低いのである。

本研究における量的データの分析からは、政府主導で展開される女性ための両立支援や、「リケジョ」を促進する政策を通じて STEM 職における女性の量的増加を目指すような方向性に対して、一定の留保を指摘できる。というのも、STEM 職業において存在する男性中心的な制度や働き方を温存して、そこに女性を(量的基準で)参加させようとしても、賃金格差や就業中断といった問題が軽減しない可能性があるからだ。特に日本や韓国といった内部労働市場優位の労働市場においては、教育内容と仕事内容の関連性が薄く、政策主導の STEM 専攻卒女性の供給拡大策はそのままでは機能しない。現在の日本や韓国で STEM 女性が直面する二重の抑圧については、もう少し根本的な変化が必要なのだ。

「女性過小現象」は科学技術分野の特徴ではなく、科学技術と労働市場における男性中心性とジェンダー不平等について現在まで女性たちが闘争している長い歴史における軌跡であり、変わる世界に対する挑戦の課題である。